

尸陀槃尼の鞞婆沙論編纂の形式と

其の支那傳譯に就いて

舟 橋 一 哉

此の論の編纂に就いて今迄に知られてゐる事は、^①此の論は「大毘婆沙論の編纂後その餘りに廣瀬にして容易に入り難きを補はんが爲に、尸陀槃尼 *Śītapāṇi* が大毘婆沙論の中から其の樞要を摘出して編纂した所の抄毘婆沙の一つである」と言ふ事である。然し私は此の鞞婆沙論編纂の動機は大毘婆沙論の要約論を作る事にあつたにもせよ、其の結果より見て此の論がその要約論として完全なるものであるか否かに就いては、大いに考ふべき餘地があると思ふ。所が之に對して道安の鞞婆沙序に傳へる所を根據として、「現存の鞞婆沙論は不完全なるが故に」との理由よりして、初の鞞婆沙論は大毘婆沙論の完全なる要約論であつたことを主張することも出来るのであるが、之等の事に就いての卑見を述べる前に先づ此の論と大毘婆沙論との關係を明に知る必要がある。

論の初に「阿羅漢尸陀槃尼撰」とあるによつて知らるゝ如く、此の論は尸陀槃尼が撰したものであつて、決して造つたものではない。言ひ換へれば、尸陀槃尼が大毘婆沙論の中から或る部分を抜き

出して編纂したのが此の論なのであるから、従つて其の中には尸陀槃尼自身の意見は殆ど入つてゐないのである。即ち全十四卷四十二處の大部分は大毘婆沙論の結蘊中不善納息と十門納息とに相當する。然も其の相當する程度は多少の出入前後はあるが、そして大體に於て大毘婆沙論より簡潔ではあるが、よく一致してゐて、大毘婆沙論の其の部分の異譯とも言ひ得られる程である。今此の論を新舊の婆沙論中の所説と對照すると次の如くなる。

上段に「一三結處」とあるは「三結處第一」の略なり。以下同じ。
 中段に「25 183a—185c」とあるは「阿毘曇毘婆沙論卷第二十五(大正藏經二十八卷一八三頁上—一八六頁下)」の略なり。以下同じ。
 下段は中段に順じて知るべし。但し大正藏經は二十七卷なり。

鞞婆沙論	阿毘曇毘婆沙論(舊譯)	大毘婆沙論(新譯)
說阿毘曇八捷度 (章處) ^③	標題無きも之に當るものあり 使捷度不善品 25 182a—183a	阿毘達磨發智大毘婆沙論序 11a—1c 結蘊不善納息 46 236b—237c
1 三結處	同右 25 183a—186c	同右 46 237c—241b
2 三不善根處	同右 25 186c—189a	同右 47 241b—243c
3 三有漏處 ^④	同右 26 189a—192b	同右 47 243c—246c
4 四流處 ^⑤	同右 26 192b—c	同右 48 247a—b

5 四受處	同右	26	192c—193c	同右	48	247b—248c
6 四縛受處 [®]	同右	26	193c—194b	同右	48	248c—249b
7 五蓋處	同右	26	194b—196b	同右	48	249b—252a
8 五結處	同右	27	196b	同右	49	252a—b
9 五下結處	同右	27	196b—197a	同右	49	252b—253b
10 五上結處	同右	27	197b—198b	同右	49	253b—254c
11 五見處	同右	27	198b—199c	同右	49	254c—256b
12 六身愛處	同右	27	199c—200a	同右	49	256b—257a
13 七使處	同右	27	200a—200c	同右	50	257a—258a
14 九結處	同右	27	200c—201c	同右	50	258a—259b
15 九十八使處	同右	27	201c—202a	同右	50	259b—c
解十門大章 [®]	使捷度十門品	37	270b	結蘊十門納息	71	366a (略述)
16 二十二根處	同右	37	270a—278b	根蘊根納息	142 143	728c—737c
17 十八界處	同右	38	278b—284b	結蘊十門納息	71 72 73	366a—378b
18 十二入處	同右	39	284c—287b	同右	73 74	378b—383a

19	五陰處	同右	39	287b—289b	同右	74	383a—386a
20	五盛陰處	同右	39	289b—290a	同右	75	386a—387a
21	六界處	同右	39	290a—291c	同右	75	387a—389b
22	色無色法處	同右	40	291c—292b	同右	75	389b—390a
23	可見不可見法處	同右	40	292b—c	同右	75	390b—c
24 [㊟]	有對無對處	同右	40	292c—293b	同右	76	391a—c
25 [㊟]	有漏無漏處	同右	40	293b	同右	76	391c—392c
26	有爲無爲法處	同右	40	293b—c	同右	76	392c—393a
27	三世處	同右	40	293c—296a	同右	76 77	393a—396b
28	善不善無記處	使捷度不善品	28	204a—c	結蘊不善納息	51	263a—c
		雜捷度智品	9	62a—63b	雜蘊智納息	15	75b—77a
29	欲界色界無色界繫法處	使捷度十門品	40	296a	結蘊十門納息	77	396b—c
		使捷度不善品	29	211a—b	結蘊不善納息	52	271b—c
30 [㊟]	學無學非學非無學法處	使捷度十門品	40	296a—b	結蘊十門納息	77	396c—397a

31 [㊤] 見斷思惟斷不斷法處	同右	40	296b	同右	77	397a
	使捷度不善品	28	207b—208b	結蘊不善納息	51	267a—c
32の1 [㊤] 四聖諦處	使捷度十門品	40 41	296b—304a	結蘊十門納息	77 78	397a—406a
	同右	41	304b—307c	同右	79	406b—411b
33四禪處	同右	41 42	307c—315a	同右	80 81	411b—420b
	同右	42 43	315a—324c	同右	81 82 83	420b—431b
34四無色處	同右	43	324c—327b	同右	83 84	431b—434b
	同右	43 44	327b—331b	同右	84 85	434b—438c
36八解脫處	同右	45	340a—341a	同右	85	438c—440b
	同右	45	341a—342c	同右	85	440b—442b
38十一切入處	同右	45	342c—346a	智蘊修智納息	105 106	546b—549c
	同右	45 46	346a—350b	智蘊他心智納息	104 105	538a—543a
39八智處	使捷度人品	36	264b—270b	結蘊有情納息	69 70	356b—366a
	同右	36	264b—270b	業蘊害生納息	120	626b—628a
40三三昧處	同右	45 46	346a—350b	同右	120	626b—628a
	同右	45 46	346a—350b	同右	120	626b—628a
41中陰處	同右	45 46	346a—350b	同右	120	626b—628a
	同右	45 46	346a—350b	同右	120	626b—628a
42四生處	同右	45 46	346a—350b	同右	120	626b—628a
	同右	45 46	346a—350b	同右	120	626b—628a

以上の比較對照によつて、我々は先づ此の論の大部分が大毘婆沙論の結蘊中、不善納息と十門納

息とに相當することを知り得る。そこで大毘婆沙論の不善納息と十門納息とは如何なる論述の形式を採つてゐるかを見るに、この二納息が發智論の同じ部分の極めて詳しい註釋である事は言ふまでも無いが、然しその大部分、即ち不善納息に於てはその約二分の一、十門納息に於てはその約三分の二は、發智論の不善納息と十門納息との初頭に於て、夫々標舉せる名目の一一に就いての詳しい解説である。即ち發智の不善納息は先づ初に「有^リ三結。謂^フ有身見結、戒禁取結、疑結^{ナリ}」とし、次に同様に三不善根・三漏・四瀑流・四軛・四取・四身繫・五蓋・五結・五順下分結・五順上分結・五見・六愛身・七隨眠・九結・九十八隨眠（この十六項目は鞞婆沙の前十五處の處名に四軛を加へたるものである）に就いても同様なる論述を繰り返して、以下に於てなざるゝ説明の中心項目を明にし、次に之等十六項目の一一に就いて三性分別・三斷分別等の諸門分別を用ひて分別してゐるのである。今大毘婆沙論は是くの如き形式によつて作されたる發智の不善納息を註釋するに當つて、初めの十六の中心項目の解釋に大半の力を費して、發智が力を入れて論ずる所のその諸門分別を註釋する場合には比較的簡單に片付けてゐる。で今、鞞婆沙論の三結處より九十八使處に到る前十五處が大毘婆沙論の不善納息に相當するのは、其の中心項目の解説の部分全體と一致するのである。（鞞婆沙は四軛處の一を缺くが故に十五處となるも實は四流處とあるを四流四軛處となすべし）^①

次に十門納息に就いて見るも之と殆ど同様であつて、大毘婆沙の十門納息中、鞞婆沙が相當する

部分は、大毘婆沙が發智の十門納息の初めに標擧せる四十二の中心項目の一一に就いて、解説を作してゐる部分である。所が十門納息に於てはこの四十二の項目中、實際に詳しい説明をなしてゐるものは、約半數に近く他の半數に就いては實は同様なる解説を爲すべきであるにも拘らず、之を他の箇所譲つてゐるのである。即ちその四十二の中心項目とは、二十二根・十八界・十二處・五蘊・五取蘊・六界・有色無色法・有見無見法・有對無對法・有漏無漏法・有爲無爲法・過去未來現在法・善不善無記法・欲界色界無色界繫法・學無學非學非無學法・見所斷修所斷無斷法・四諦・四靜慮・四無量・四無色・八解脫・八勝處・十遍處・八智・三三摩地・三重三摩地の二十六項目（最後の一を除いて残りは毘婆沙の第十六處より第四十處までの處名である）の次に前述の不善納息の十六項目を其の儘同じ順序で附け加へたものであるが、今婆沙論が此の四十二の項目の一一に就いての解説を爲すに當つて、後の十六項目即ち不善納息の十六項目に就いては、既に不善納息に於て解説されてゐるが故に、「三結乃至九十八隨眠、如^シ此蘊初^ノ已^ニ廣^ク分別^{セルガ}」^⑩と言つて十門納息中には出さず、その他善不善無記法の解説は結蘊不善納息と雜蘊智納息中に出して此處には出さず、欲界色界無色界繫法と見所斷修所斷無斷法と解説の大部分は結蘊不善納息中に出して十門納息中には出てゐない。以上は新舊の婆沙共に同様であるが、新譯の婆沙論では以上の外二十二根の解説を根蘊根納息中に出し、八智の解説を智蘊修智納息中に、三三摩地の解説を智蘊他心智納息中に出してゐる。然し之等他納息中に出づる解説も

實はこの十門納息中にも出すべきである事は「何蘊何納息中に説くが如し」と夫々注意してゐるによつて明である。最後の三重三摩地の解説は新舊の婆沙共に夫々三三摩地の次に出してゐるが、この一處は鞞婆沙には缺けてゐる。で今、此の尸陀鞞婆沙の二十二根處より三三昧處に到る二十五處は大毘婆沙論の十門納息中に出づる解説と、及び出づべくして他の納息中に出づる之等の解説の中から三結乃至九十八隨眠と三重三摩地に就いての解説を除いた残りの二十五項目に就いての解説に相當するのである。言ひ換へれば尸陀鞞婆沙の始め四十處は發智論の十門納息の初頭に標舉せる四十二項目中三重三摩地を除ける残りの四十一項目に就いて、大毘婆沙論が解説を施してゐるその解説と一致する譯である。何故ならば三結乃至九十八隨眠の説明は大毘婆沙論に於ては順序こそ異れ、そは實は十門納息中三三摩地・三重三摩地の説明の次にも出づべきものであるからである。それ故に道安の鞞婆沙序には此の尸陀鞞婆沙は「阿毘曇十門之本を釋」せるもの、即ち發智論十門品の釋なりとさへ言はれてゐる。以上の如く尸陀鞞婆沙の前四十處は大小二つの部分より成つてゐて初めの十五處は大毘婆沙論の不善納息の初め約半分に相當する。此の部分は小章と言はれるが、これが小章と言はれる事は尸陀鞞婆沙の九十八使處第十五の最後に「廣說九十八使處盡。鞞婆沙說不善品小章竟。」とあるによつて明である。次の二十五處は略、大毘婆沙論の十門納息の初め約三分の二に相當して、此の部分は本章と言はれる。之が本章と言はれる事は、小章が終つて次に「解十門大章」とある

によつても知られ、又三三昧處第四十の終りに、「廣說三三昧處盡。廣說大章盡。」とあるによつても明である。^⑩

以上戸陀鞞婆沙の前四十處の組織に就いて述べたが、然らば戸陀槃尼は如何にして此の四十處を編述したかと言ふに、道安の鞞婆沙序に依れば、前述の如く戸陀槃尼が發智の十門品を直接釋したかの如くであり、更に「發智論の製作後戸陀槃尼と達悉と鞞羅尼とが各々鞞婆沙を撰したが、達悉の作は詳密にして煩に近く、鞞羅尼の作は要なれども略に近く、この戸陀槃尼の作のみ煩に非ず略に非ず最も明快なるものである」と言つてゐる。此處に「鞞婆沙を撰す」と言ふも、大毘婆沙論の編纂に就いては何等記す所がなく、唯、迦旃延子が發智論を作つた事を記すのみであるから、此の記事のみでは戸陀槃尼が自ら發智論を釋したものが此の鞞婆沙であるとしか考へられない。然し事實はさうではなくして、古來考へられて來た如く、一度大毘婆沙論が編纂され、その中から一部分が抜き出されて戸陀鞞婆沙が出來上つたのである。^⑪

ではその戸陀鞞婆沙の臺本となつた大毘婆沙論は、如何なるものであつたであらうかと言ふに、私には先きの三本の對照表よりして、說示の次第のみに就いては今日の新舊の大毘婆沙論とは幾分の相異があつたものと考へる。今新舊の婆沙論に就いて見るに前述の如く二十二根と八智と三三昧との解説は、その出づる場所が新譯と舊譯とで各々異つてゐて、舊譯は鞞婆沙と同じ順序を採つて之を

十門納息中に出し新譯では十門納息中には出さずして他の納息中に出してゐる。之は凡らく是くの如くした方が全體の組織から見て適當であると考へた爲であつて、例へば二十二根の説明ならば之を結蘊の十門納息中に出すよりは、根蘊の根納息中に出した方が相應しい爲に、十門納息中にあつて根納息中には無かつた此の説明を、逆に十門納息より根納息へ移したものと想はれる。斯の様な事は新舊の婆沙論全體を通じて（但し舊譯は後半を缺く）屢々見出される事であるが、之によつて我々は、婆沙論が編纂されて後その説示の次第に幾分の移動が行はれた事を知り得る。即ち始めは舊譯の婆沙論に近い組織によつて編纂されてゐたものが、後に同じ項目に就いての説明は之を一括して同じ場所に置く様になり、順次に整理されて遂に今日の新譯の婆沙論となつたのではあるまいか。之より逆推すること、及び尸陀鞞婆沙と舊譯の婆沙論との間にすら尙未だ一致せざる或る部分の存する事とよりして、私は舊譯の婆沙論よりも、もつと古い形の婆沙論があつた事を信ずる。そして凡らく尸陀鞞婆沙は、其の最も古い形の大毘婆沙論を臺本として編纂されたのであらう。¹⁵ 其の結果、前四十處の組織が新譯の婆沙論よりは、舊譯の婆沙論により好く合する様になり、尙それ以上に舊譯とも合せざる様な或る部分を殘すに到つたのではあるまいか。以上は唯説示の次第のみに就いて述べたのであるが、此の事は論文そのものに就いても言ひ得られると想ふ。今婆沙の三本を比較すると尸陀鞞婆沙は最も簡單であつて、舊譯の阿毘曇毘婆沙は之に次ぎ、新譯の婆沙論は最も詳

細である。又新譯と比較して舊譯に脱漏ある場合、それを尸陀鞞婆沙と比較して同じく脱漏を發見する様な事は屢々である。之等の事を、尸陀鞞婆沙が三本中で最古の翻譯である事と合はせて考へる時、尸陀鞞婆沙の編纂が最も古い、少くとも現存のものよりは古い大毘婆沙論を臺本として爲されたことを想定してもよいと思ふ。

以上で尸陀鞞婆沙の前四十處に就いては略明になつたと想ふが、殘された後の二處即ち中陰處と四生處とに就いては道安の鞞婆沙序と關連して可成り厄介な問題が殘されてゐる。即ち前の道安の鞞婆沙序に言ふ、

「……會建元十九年、罽賓沙門僧伽跋澄、諷誦此經四十二處。是尸陀槃尼所撰者也。……經本甚多其人忘失。唯四十事、是釋阿毘曇十門之本。而分十五事、爲小品廻著前。以二十五事爲大品而著後。此大小二品全無所損。其後二處是忘失之遺者。令第而次之。……」と。

問題となるのは最後の一句即ち「其の後の二處云云」の記事であるが、境野博士は其の著「支那佛教史講話」並びに「支那佛教史の研究」に於て之を「其の後の二處は是れ之を忘失す」と讀まれそして之を解釋して、「鞞婆沙は發智の四十四處の中で四十二處を釋したものであるから、二處を缺くと言ふのである」として、現存の鞞婆沙の四十二處に譯者僧伽跋澄が忘失せる二處（如何なる名稱か不明であるが）を加へると、完全なる尸陀鞞婆沙四十四處となると考へて居られたもの、様

である。然し之は發智の四十四品と鞞婆沙の四十二處との間に數の上に於て、偶然にも二なる差を生じた事によつて、品と處とを混同した爲めの誤りであつて、前に述べた様に鞞婆沙は發智の四十四品の中では十門品の一品中に其の大部分は收まる譯である。

で今私はこれに就いて二つの考へを持つてゐる。其の第一は道安の序を先きに引用せる如く讀んで、(實は境野博士の如く讀んでも同様であるが)、「後の二處」とは中陰處と四生處とを示すものと見たいと思ふ。序の始めに「此の經の四十二處を諷誦す」と言ひ、次に「唯四十事は云云」と言つて、更に「此の大小二品は全く損する所無し」と言へるより見る時は、「其の後の二處」^⑮とは明に現存の鞞婆沙の最後の二處、即ち中陰處と四生處とを指すものとしか想はれない。次に「忘失の遺者なり」とあるは、「全く損する所なき」前四十處に對して、此の二處に幾らかの脱漏のあつた事を意味するものではないであらうか。道安の傳へる所では跋澄は此の論を暗誦してゐて、その跋澄の記憶を基として此の論が譯出されたことになつてゐる。従つて後の二處に就いては跋澄の記憶が不確實であつた爲に、僅に其の一分を譯したに過ぎなかつたと言ふ事も有り得るに違ひない。然らば現存の鞞婆沙の此の二處に脱漏のある事が認めらるゝかと言ふに、新舊の婆沙論と比較して何等の遺漏をも發見し得ないのである。勿論この二處と雖も新舊の婆沙論に全く一致する譯では無く可成りの出入と前後の顛倒とが見出されるが、然し之は「全く損する所無し」と言はれた前四十處

に就いても同様であつて、殊に後半四聖諦處以下は相當混亂してゐる様であるから、此の二處のみに限つて「忘失の遺者」と言ふは甚だ解し兼ねる様にも想はれるのである。然し乍ら之に就いて道安の序は翻譯の事情に關する限り信用すべきではあらうが、其の他の事に就いては可成りの誤謬があるらしい。例へば「全く損する所なし」と言はれた前四十處に就いても、今日より見れば脱漏があると想はれるが如き、⁽²⁰⁾或は前述の如く此の論を以つて直接發智論を釋したものであるかの如く言へるが如き、或は此の論の字數を秦語にて十六萬五千九百七十五字と言へるが如きは明に道安の誤りと考へられるのである。従つて今「後の二處は是れ忘失の遺者なり」と言ふも、實は現存のものゝ如く略完全なものであつたかも知れない。然しその罪は決して道安に在る譯ではなく、當時凡らく大毘婆沙論の梵本は未だ支那には傳つてゐなかつたのであらうから、⁽²¹⁾跋澄も道安もさう信じてゐたものであらう。今一步讓つて跋澄が譯した鞞婆沙の後の二處には甚だしき脱漏があつたとするも、後に言ふが如く現存の鞞婆沙は跋澄の譯した其の儘のものではなく、後に僧伽提婆が改譯したものであり、殊に其の改譯の爲された理由は單に辭句が難澁なるが故にと言ふのではなくして、先きの缺漏⁽²²⁾(失)を補はんが爲であつたと言ふより見れば現存の鞞婆沙の此の二處は大部分提婆の譯したものであるかも知れない。「若し是くの如く考へるならば此の二處と前四十處との間に譯語の相異が見出される筈ではないか」との難もあり得るが、然し跋澄と提婆とは同時代の人であり、殊

に提婆は跋澄と共に席を同じうして、譯經の事業に携つた事もある程であるから、そして又提婆の改譯は全體に互つて行はれたであらうから、現存の鞞婆沙に於て譯語の相異を發見し得なくとも何等の不思議もない譯である。²⁴

以上の考へ方とは別に次の如く、即ち「後の二處は是れ忘失の遺者なり」とは、此の二處以外に幾らかの他の處も存在してゐたのであるが、之等は跋澄の記憶になく、唯跋澄の記憶に残れる此の二處のみを譯して前四十處の次に置けるものとする事も出来るのである。然し之等二處以外に如何なる處が如何程あつたか全く不明である上に、前四十處の組織より見る時は之等二處と雖も單に附録的に附加されたものゝ様であるから、此の二處以外に多くの失はれたる處があつたとは想はれない。従つて私は前説の方が眞に近いものと想ふ。

次に如何なる理由からして尸陀槃尼は此の二處をも鞞婆沙の中に取り入れたかと言ふに、凡らく中有の建立は有部に取つて極めて大切な教義であつたからであらう。それ以外、不幸にして未だ何等充分なる理由を發見し得ないのである。そして此の事は三彌底部論(三卷)に於て中有の説明が殆ど全體に互つて詳しくなされてゐる事と何等かの關係があるのではあるまいか。ともあれ全體の組織より見るならば、この後の二處は前四十處に對しては附録的な説明であつて、抄毘婆沙としての前四十處の缺陷を補つたものであらう。然らば之にて抄毘婆沙として完全なものであるかと言ふ

に、私は決してさうは想はない。何故ならば此の鞞婆沙は大毘婆沙論全體の要約論ではなくして僅にその中の二納息(不善と十門)中の或る部分と及び他のある部分との合論に過ぎないからである。そしてこの考へ方に對してはこの稿の初に記せる如き、「現存の鞞婆沙は不完全なるが故に」との理由は、私の考へによる限り當て填らない事になる。何故ならば私は前述の如く現存の鞞婆沙を以つて完全本と見做した方が正しいと思ふからである。是くの如く此の鞞婆沙は大毘婆沙論の要約論を造る爲に編纂されたものではあるが、其の中には器世間に關する説明を全く缺き、又業の説明極めて少く、六因四縁の建立なく、十二因縁の説明を缺く等、到底毘婆沙の要約論として完全なものとは想はれない。然し乍ら其の中には四十二の題名によつても知らるゝ如く、種々なる項目に關する説明を含んでゐて是くの如き形式によつて成された抄毘婆沙としては、(是の形式を捨てない限り完全な要約論は出來ないであらうから) 凡らく相當の程度まで成功せるものと見て差支へないであらう。殊に前四十處の如きは勞せずして毘婆沙の抄論を造り得たものとして注意していゝ。

最終に支那に於ける此の論の流傳に關しての興味ある事實を紹介して此の稿を終らうと思ふ。それは前述の如く此の論は始め僧伽跋澄によつて譯され、後間もなく僧伽提婆が改譯して其の失を補つたのであるが、開元釋經錄が出來る迄は此の論は僧伽提婆譯として流布されてゐたらしい事からして、現存の鞞婆沙は實は僧伽跋澄の譯とするよりは、僧伽提婆の譯とした方が適當なのではな

らうかと言ふ事である。

先づ史傳の方より見るに、最も古いと想はれる道慈の「中阿含序」⁽²⁰⁾に據れば、提婆の改譯を記すに、「更出」の文字を以つて表はしてゐる。高僧傳等の此の後の諸傳は總て此の中阿含序に據れるものゝ如くであるが、今「更に出す」と言ふは單に「訂正した」とか、「筆を加へた」とか言ふ位の程度とは想はれず、凡らく「改譯」とか「重譯」とか言へる程のものであつたのではなからうか。

次に經錄であるが開元釋經錄以前の諸錄に記す所を一括して表示すると次の如くである。

經錄	譯者	僧伽跋澄譯	僧伽提婆譯
出三藏記集		雜阿毘曇毘婆沙 (10b)	鞞婆沙阿毘曇 (10c)
歷代三寶記		阿毘曇毘婆沙 (76a)	毘婆沙阿毘曇 (76a)
衆經目錄(法經學撰)		雜阿毘曇毘婆沙論 (142b)	毘婆沙阿毘曇論 (142b)
衆經目錄(彥棕撰)		缺	毘婆沙阿毘曇論 (15c)
衆經目錄(靜泰撰)		雜阿毘曇毘婆沙論 <small>(闕本とす)</small> (215c)	鞞婆沙阿毘曇 (188b)
大唐內典錄の歷代衆經傳譯所從錄		阿毘曇毘婆沙 (250b)	毘婆沙阿毘曇 (250b)
同 歷代小乘藏經翻本單重傳譯有無錄		缺	鞞婆沙阿毘曇 (301c)

尸陀婆尼の鞞婆沙論編纂の形式と其の支那傳譯に就いて

同	歷代衆經見入藏錄	缺	鞞婆沙阿毘曇論 (311a)
同	歷代衆經舉要轉讀錄	缺	鞞婆沙阿毘曇論 (324c)
古今譯經圖紀	雜阿毘曇婆沙論 (353b)	阿毘曇毘婆沙 (434c)	毘婆沙阿毘曇 (356c)
大周刊定衆經目錄の小乘律小乘論賢聖集傳	阿毘曇毘婆沙 (434c)	鞞婆沙阿毘曇論 (434c)	鞞婆沙阿毘曇論 (470c)
同	見定流行入藏錄	缺	

備考 數字は大正藏經の頁数を示す。但「歷代三寶記」は四十九卷、他は總て五十五卷なり。

右に表示するが如く、開元釋教錄以前の經錄は跋澄の譯と提婆の譯とを共に記すものと、跋澄の譯を缺いて提婆の譯のみ記すものとあるが、之等を詳細に檢べて見る時は、跋澄の譯を記す經錄は實は當時其處に記載せる經論が存在してゐたと言ふのではなく、その存在不存在に拘らず、且つてかゝる經論がかゝる譯者によつて譯されたことがある、と言ふ事實を記載してゐるものであり、當時存在してゐたものを記すと想はれる經錄では跋澄の譯は缺けてゐる。のみならず、靜泰の衆經目錄の如きは明かに之を以つて闕本なりとしてゐる所より見れば當時流傳されてゐたものは提婆の譯のみであつたと見て差支へないと想はれる。

所が次の開元釋經錄へ來ると俄然様子が一變して、興味ある新事實に遭遇する。即ち其の總括群經錄中に於て僧伽跋澄の譯した「鞞婆沙論十四卷」を、他の同じく跋澄の譯した二論と共に並べ掲

げて、「右三部二十七卷其本竝在」としてゐるが、然し之によつて跋澄の譯が當時存在してゐたものと速斷するは誤りである。何故ならば此處に跋澄譯の鞞婆沙論十四卷と言へるものこそ、實は今まで提婆譯として傳へられて來たものであるからである。この事は直ぐ次の跋澄の傳の最後に附け加へられた細註を見れば明であつて、それは次の如くである。

祐等群錄並云、鞞婆沙論僧伽提婆譯。今准安公論序、云僧伽跋澄譯。今准論序爲正。祐等群錄復云、跋澄譯雜阿毘曇毘婆沙論十四卷者、卽鞞婆沙論是也。

卽ち提婆譯の鞞婆沙論に道安の鞞婆沙序が附加されたまゝのものが從來世に行はれてゐたらしいのであるが、その鞞婆沙序は實は跋澄譯に附加さるべきものであつた爲に、鞞婆沙序に「之は跋澄の譯なり」と言へるに據つて、提婆の譯とありしものを今始めて跋澄譯と訂正したと言ふのである。之は道安が鞞婆沙序を作つたのは提婆の改譯以前であつた爲に、鞞婆沙序は提婆の改譯に就て何等の記録をも有してゐないからである。是くの如く提婆の譯を跋澄譯と訂正しても、元より跋澄の譯は世に行はれなかつたのであるから、今迄提婆譯として傳へられてゐたものが、跋澄譯と名前を換へた丈で、跋澄譯に二本ある事になつた譯ではない。従つて「從來の經錄に言へる跋澄譯の雜阿毘曇毘婆沙論は卽ち今此の鞞婆沙論なり」と注意したのである。この結果は開元釋教錄に於て提婆の譯出經典中よりこの鞞婆沙論を除くこととなり、以後提婆の譯なる此の論は完全に跋澄の譯と

④ して後世に傳へられたが、其の鞞婆沙論が今日我々の持つ鞞婆沙論なのである。故に現存の此の論は曾つては僧伽提婆譯として世に行はれてゐたのであるから提婆譯と訂正した方が適當であらうと思ふ。然し前述の如く提婆の譯は跋澄の譯の失を補つて「更に出」したものであるから、跋澄譯とするも決して誤りでは無い。況や跋澄と提婆とは前にも言へる如く、極めて親しい間柄にあり、兩者の他の譯出經典を參照するも、兩者の譯語の相異を發見し得ない程であるから、必ずしも提婆譯と改める必要は無い。然し之と轍を同じうする事實が現存の増一阿含に於ても見出されるが、之を後に改譯した提婆の譯としてゐるに準じて、今の鞞婆沙も提婆の譯とした方がいゝ様に想ふ。

註①、境野博士著「支那佛教史の研究」、一一二頁。「支那佛教史講話」上、八三頁以下、四二〇頁以下。木村博士著「阿毘達磨論の研究」、二六〇頁以下。宇井博士著「印度哲學史」二二二頁。宮本正尊氏論文「譬喩者、大德法救、童受、喩喩論の研究」(日本佛教學協會年報第一年、一六五頁)。高楠博士著「The abhidharma literature of the Sarvastivādins」J. P. T. S. 1905, p. 125.

②、出三藏記集卷十(大正五十五、七三頁)。尙、木村博士、境野博士、宇井博士等は此の論を不完全本と見て居られる。

③、鞞婆沙に章處の標題は無いが大正藏經廿八、四一八頁中段に「序阿毘曇竟」と細註があるから此處で說阿毘曇八度度は終る。従つて以下四一九頁中段の三結處迄は何れの標題にも含まれない事となる。そこで三結處の直前の「廣說章處盡」とあるのを取つて假に此の一處を設けて此の部分を受めた。之は鞞婆沙・前十五處即ち小章の一般論であるが、此の邊り論に脱落があるものと想はれる。

④、此の處には最後に新舊の婆沙論に無い部分が附加されてゐる。

⑤、四流處は實は四流四扼處と訂正すべきものと想ふ。何故ならば此の處の終りに近く、「如二四流一四扼亦爾」と言ひ、最後に「廣説四流四扼處盡」と言つてゐるからである。又鞞婆沙の初め説阿毘曇八捷度の次に三結乃至九十八使の名目を掲げてゐる中にも四扼を加へて十六項目としてゐる。(解十門大章も亦四扼を加ふ)。此の十六の項目は此れより本論に入つて廣説せんとする中心項目を先づ標擧したのであるから、四流四扼處とすべきである。尙婆沙論に於ても四扼の説明は極めて簡單であるから、文章の上に於ては鞞婆沙に脱漏があるとは想はれない。

⑥、四縛受處は四縛處と訂正すべきである。何故ならば、此の處の初めに「四縛者云云」と言ひ、最後にも「廣説四縛處盡」と結び、又説阿毘曇八捷度の次、及び解十門大章にも四縛としてゐるからである。四縛受と言ふは凡らく、前の四受處と混亂したものであらう。

⑦、九十八使處の最後に「鞞婆沙説不善品小章竟」とあるからこれで小章は終る。以下第四十處までは大章であるから此處に解十門大章と標して以下の廣説の中心項目を掲げたのである。之は小章の始め即ち説阿毘曇八捷度の次に、三結乃至九十八使の名を掲げたのと相對するものである。従つて小章の初にも「解十門大章」に對して「解不善品小章」の標題があるべきものと想ふ。

⑧、之等二處は夫々最後の文によつて、有對無對處は有對無對法處と訂正し、有漏無漏處は有漏無漏法處と訂正すべきであることを知る。

⑨、之等二處の夫々の最後の文には「法」の字無きも、前に準じて訂正せずに置く。

⑩、四聖諦處以下は婆沙論との間に可成りの出入混亂が見受けられる。

⑪、註五參照。尙發智論の舊譯は四扼を加へて五上分結を缺き、又後に言ふ三重三摩地をも缺く。

⑫、大正廿七卷、四四二頁、中。

⑬、高楠博士は“The abhidharma literature of the Sarvastivādins”に於て、鞞婆沙論の内容を三分して、序阿毘曇と小章と

尸陀槃尼の鞞婆沙論編纂の形式と其の支那傳譯に就いて

解十門大章となし、此の解十門大章の中へ二十二根處より四生處に到る迄の全部を含ましめて居られる。

- ⑭、何故ならば若し先づ尸陀槃尼が直ちに發智論を釋して鞞婆沙を基礎として今日の大毘婆沙論が出来たとするならば、大毘婆沙論の何處かに尸陀槃尼の事が記されてゐる筈であるし、又尸陀槃尼は鞞婆沙を造るに當つて、十門納息の始めの名目の竝べ方、解十門大章と同じの如く二十二根處より始めて九十八使處に終る如き順序を採つたであらう。然るに此の正しい順序を破つて三結乃至九十八使の解説を始に置いて、之を(不善品)小章と名付けて後の(十門)大章と區別したのは、大毘婆沙論に於て三結乃至九十八使の解説(不善品に出づ)の方が、二十二根乃至三三昧の解説(十門品に出づ)よりも前きに爲されてゐた爲であると想はれる。

- ⑮、此の考へ方は現存の婆沙論に於て省略せられてゐる所は、其の梵本に於ても同じ様に省略せられてゐたと言ふことを前提としてゐるが、之には次の様な理由からして反對があるかも知れない。即ち梵本には兩方の場所に同じ様な繰り返へしを出してゐたのを、漢譯者が翻譯する時に、その一つのみを譯して他は之を略した結果であると。所が私はさうは想はれない何故ならば二十二根處と言ふ様な大量な一處が前後に同じ様に繰り返へされてゐたと言ふ事が既に不自然である上に、若し兩方に繰り返へされてゐるの何れかを省略するとしたならば、前出のものを翻譯して後出のものを省略するのが當然であると想はれる。然るに二十二根・八智・三三昧の解説は新譯に於ては後出のもののみ翻譯されてゐるからである。のみならず次の様な矛盾に陥る。即ち之を許せば其の結果三結乃至九十八使の解説即ち鞞婆沙の小章全體が婆沙の不善納息と十門納息との兩方に出てゐたことになるのであるが、此の様なことは事實として到底あり得ない。一步譲つて是くの如きことがあつたとするも、註十四に示すが如き理由よりして少くとも鞞婆沙の臺本となつた婆沙論に於ては三結乃至九十八使の解説は不善品にのみ出てゐて、十門品には省略されてゐた事は確かである。

- ⑯、例せば阿毘曇毘婆沙論卷廿六(大正廿八、一九六頁上)と鞞婆沙論卷三(大正廿八、四三二頁下)と大毘婆沙論卷四十八(大正廿七、二五一頁)の如し。

- ⑰、註一參照。

15、異本に據れば此の「二」の字が脱落せるものもあるが、「其の後の處」と言ふも前よりの連絡で「其の後の二處」と言ふと同じ意味になると想ふ。

19、前出の鞞婆沙序。「支那佛教史講話」上、八三頁參照。

20、鞞婆沙の十章は三三昧處で終つてゐるが、新舊の婆沙論との對照によつて其の次に三重三昧處を加ふべきであると思ふ。

註三、五、六、七、八、九參照。

21、此の字數は現存の鞞婆沙論より一萬語強の超過となつてゐる。

22、鞞婆沙論は舊譯の婆沙論より以前の翻譯である。又鞞婆沙は僧伽跋澄の暗誦せる所に從つて翻譯されたと傳へられてゐる事をも合せて顧慮すべきである。

23、「中阿含序」(出三藏記集九、大正五五、六四頁上)。

24、出三藏記集十三(大正五五、九九頁下)に據れば提婆と跋澄と共同して婆須蜜經を譯してゐる。

25、是くの如く考へるならば、跋澄の譯した當時の鞞婆沙は現存のものより更に短く、前きの十六萬云々の語數と二萬に近い隔りを見る譯であるが、此の語數は註二十一に示す如く、何等か誤りのあるものとして置く。

26、註二十三參照。出三藏記集十三(大正五五、九九頁)の僧伽提婆傳。高僧傳一(大正五〇、三二八、三二九頁)。歷代三寶紀八(大正四九、七六頁)。出三藏記集十五(大正五五、一〇九頁上)參照。

27、出三藏記集と歷代三寶紀と古今譯經圖紀とに於て跋澄の譯を記載せる部分は共に同じ形式より成つてゐる。即ち譯出せられた經論を標準として分類せるものではなく、譯者に據つて分類せるものである。是くの如き形式を採用せるものは當時其處に記載せる經論が存在してゐた證據にはならないと思ふ。又大周刊定衆經目錄に於て跋澄譯を記してゐる所には、「出長房錄」の字があるから歷代三寶紀に據つたものであることは明であるし、又大唐內典錄の歷代衆經譯所從錄も之と同じくその名稱よりして、又所々に「見何々錄」の文字があることよりして、古い經錄に從つたものであると思はれる。次に法經等撰の衆經目錄の此の部分は譯出經典を標準として分類せるものであるにも拘らず跋澄の譯を出してゐる。然し

戸陀槃尼の鞞婆沙論編纂の形式と其の支那傳譯に就いて

此の譯を以つて雜阿毘曇心論と同本異譯なりとしてゐるのは極めて奇怪である。之は凡らく出三藏記集に記載された跋澄譯の鞞婆沙論の細註に、「或云雜阿毘曇心」とあるに據つた爲の誤りであらうが、これよりして、法經等は跋澄譯の鞞婆沙論の内容に就いては全く知ること無くして唯その名稱のみよりして之を經錄に記載したことを知ることが出来る。そしてこの事は次の靜泰撰の衆經目錄にも繼承されてゐるが、此處に於ては之を闕本としてゐる。又法經等撰の此の經錄に於て提婆譯の鞞婆沙論を「譯定本」として、衆論一譯の項に收め、「衆論異譯」の項には唯雜阿毘曇心論の異譯であると考へられた跋澄譯の鞞婆沙論のみを出してゐること及び、彦棕撰の衆經目錄と靜泰撰の衆經目錄とに於て提婆の譯は「小乘論單本」中に收められてゐることとに據つても、當時提婆の譯のみしか存在してゐなかつたことが解る。

⑳、大正五五、五一〇頁下に出づ。尙今日の「鞞婆沙論」と言ふ名稱は開元釋教錄に到つて始めて用ひられた名稱であることを注意すべきである。

㉑、僧伽提婆の傳の次に「其鞞婆沙十四卷淮安公序是跋澄譯。今此除之。」と細註がある。(大正五五、五一頁中)。

㉒、開元釋教錄略出卷第四、(大正五五、七四三頁下)。貞元新定釋教目錄卷第五(大正五五、八〇七頁下、八〇八頁上)參照。

㉓、鞞婆沙論卷七(大正廿八、四六八頁下)に出づる「若已盡不生」等の二偈が殆どその儘八捷度論(提婆譯)(大正廿六、九一五頁中下)に出づるが如き等注意を要する。

㉔、現存の增一阿含(僧伽提婆譯)は曇摩難提の譯したものを、後、僧伽提婆が改譯したものであるが、現在增一阿含の初に附け加へられてゐる道安の序は實は曇摩難提の譯に附け加へらるべきものである。(支那佛教史講話)上、八〇頁)。